書評

松本直樹著『出雲国風土記注釈』

青木周平

研究者は、生涯に一度は注釈書を作りたいと思うものである。私もその一人であり、松本氏も本書の「あとがき」で、「研究者人生の終わりまでに大きな注釈書を一冊書きたいと、いつの頃からか思うようになった。」と述懐する。その「大きな注釈書」を、四十代半ばの若さで纏められた力量は、尋常なものではない。いうまでもなく、注釈を作るには、その対象となる作品に対する一貫した高い水準の読みが要求される。さらに、諸本校合や訓読を通したテキスト・クリティークの能力が問われることになる。それらの点がクリアされているかどうか、できるだけ具体例を挙げつつ検討してみたい。

まず本書の構成であるが、大きく「注釈篇」と「研究篇」、そして「付録」から成る。本書を紐解いて最初に目に付くのが、「付録」の充実である。そこにある「地名遺称地一覧」「神社一覧」はとても便利であり、とくに「動植物一覧」は労作といってもよい。動植物の記載の多さは『出雲国風土記』の特徴でもあるが、写本の字体の判断や訓読において、迷うケースも多い。和名抄、新撰字鏡、類聚名義抄や延喜式典薬寮の記事などを参照しつつ訓読や意味を決定していくことになるが、その出典を明記してあるのもありがたい。また「出雲国造神賀詞注釈」は「付録」のレベルを超えた力作であり、その注の詳細さは、風土記の注を上回るものがある。本書にかける著者の意気込みと自信が十分うかがわれる。

次に「研究篇」をみる。第一章から第四章まであるが、風土記に深く関わるのは、第一章「『出雲国風土記』の「神話」」と第二章「出雲郡健部郷条について」である。その風土記観を端的に示す一文を挙げてみる。

許容できるぎりぎりの線で「記紀神話」の内容を認めたり、或いは、まるごと「記紀神話」を黙認しながら、「記紀神話」の権威を保ち、その権威に頼ることで、「出雲国風土記神話」の全体が説得力を確保していたのではないだろうか。（四二三頁）

第一章に「「記紀神話」の享受」と副題を付けた理由も右から明確であるが、第二章では、「記紀の享受」に広げて、次のように述べる。

中央の神話伝説は、地方の神の信仰や神話の力を利用しながら、天皇による天下統治を正当化すべく時間軸に沿う形で体系化された。一方、「風土記」も、記紀の権威を借りながら、地方独自の「神話」「歴史」の再編を試みた。（四四四頁）

風土記が記紀を享受したかどうかは、大問題である。著者の右の見方は、前著『古事記神話論』（新典社、二〇〇三年十月刊）の神話観の延長として提出されたものであり、作品論としてそれなりの

説得力をもつ。これらの論が「一貫した高い水準の読み」の保証として用意されたことは間違いあるまい。しかし、記紀の直接的な影響が明確に指摘できる箇所は、評者の見るところでは少ない。まだまだ議論の余地がある問題である。

以下、「注釈篇」に絞って、その考察を辿ってみたい。「注釈篇」の構成は、最初に校訂本文を挙げ、〔校異〕〔訓読文〕〔注釈〕〔現代語訳〕〔考察〕となる。その手順は理に適っており、スムーズに読み進めることができる。冒頭部を例にとって検討してみる。

まず本文を、「國之大體、首震尾坤、東南山、西北属海。」と定める。著者は「凡例」において、底本を細川家本とし、倉野本、日御碕本、万葉緯本、出雲国風土記抄と校合したとある。その諸本間の異同の指摘は、底本の文字に問題がある場合を主として取り上げるという。この校訂態度は妥当なものである。現状において最善本は細川家本であり、その用字を重視するのは当然といってよい。ただその最善本も近世を遡り得ないものであるところに、風土記校訂作業の難しさがある。幸いなことに、出雲の場合は、他の風土記と違い、系統の異なる写本群をもつ。加藤義成氏はその二群を再脱落本（甲類）、補訂本（丙類）と呼ばれるが、私は中央系、出雲系と呼び慣わしている。前者が江戸幕府による風土記収集事業に関わる諸本であり、後者は、主に松江藩や出雲在住の国学者たちの仕事による諸本である。この二系をどう扱うかで校訂本文にはかなりの違いがでる。著者は、諸本としては、明らかに前者に比重を置き、後者は注釈書として主に用いる。本文が後者と同一の場合は「文意により改める。」というゆえんである。しかし、特に後者の出雲国風土記抄は、前者にも比すべき書写年次をもつ写本であり、評者は対校本として重視する立場をとる。これは前田本『釈日本紀』の本文との校合結果を踏まえての立場であるが、著者とは少しスタンスが違う。冒頭部の本文に話を戻す。著者は諸本一致した「東南宮北属海」の「宮」を、「山西」の「草書体での誤字」と認め、「東と南は山にして、西と北とは海に属く。」と訓読する。この誤字説は最近のテキスト類が多く採る説でもある。著者の自説は、〔注釈〕の「首震尾坤」の部分にある。

東を首とすることについては、日の出る方角を基本とした古代人的思考であるとする説があるが、正格漢文で国の大略や編纂方針を表明する序文としての性格と古代人的思考との間には距離を感じる。また、東が都からの入口であったことによるとする説がある。それならば郡の記載順序も山陰道に沿う形になっている方が相応しいが、実際の記載順序は東部の意宇郡から始まり島根半島を西へ進み、さらに内陸部を西から東へ戻り、ほぼ中央の大原郡で終わっている。国府のある意宇郡が最も東にあったことによると考えるのが妥当ではないか。（三二頁）

右は諸説を検討した上で提出された自説であり、一つの見識を示している。もう一つ、著者の説が明確に示されている、「楯縫郡」起源記事の〔訓読文〕を挙げてみよう。

楯縫と号くる所以は、神魂命詔りたまひしく「吾が十足る天

の日栖の宮の縦横の御量は、千尋の栲縄持ちて、百八十結び結び下げて、此の天の御量を持ちて、所造天下大神の宮造り奉らむ」と詔りたまひて、御子天御鳥命を、楯部と為て、天下し給ひき。尓の時、退り下り来坐して、大神の宮の御装の楯造り始め給ひし所是なり。仍りて今に至るまで、楯桙造りて、皇神等に奉り出づ。故、楯縫と云ふ。（一九〇～一九一頁）

右の用字のうち、傍線を付した「縦」「量」は、出雲系の用字である。文意により改める、とあるのは、先述したように、出雲国風土記抄などを校訂対象として重視していないからであろう。もう一つ傍線を付した「下」は、底本（中央系）の用字である。出雲国風土記抄には「降」とあり、前田本『釈日本紀』にも「降」とある。『釈日本紀』の引用文は、近世を遡る唯一の本文である。また、他の「下」の使用例を考えても、ここは「天降し給ひき。」の方がよい。他の訓読は概ね認められる。著者の説の特徴は〔注釈〕によくうかがえる。「十足る」が古事記にあり、「天の日栖の宮」が日本書紀第九段一書第二に見えることなどから、記紀神話の影響を認める。特に「皇神」を「記紀神話とのやりとりが認められる当該条の文脈として理解すべきである。」と解するのは、説得力がある。当該条が日本書紀第九段一書第二と無関係でないことは、すでに多くの指摘がある。しかし紀が当該条の資料となったことを前提とした立論は、そう多くはない。著者の説の特徴は、記紀との関係を「記紀の享受」と一方的関係で捉え直した点にある。「高皇産霊尊」（紀一書第二）を「神魂命」（当該条）に変えたのは、出雲国造側の主張であり、そのカミムスヒの立場は古事記により保証されているという。その考えは〔考察〕の項で次のようにまとめられている。

当該条の伝承は、紀一書の国譲りを下敷きにしつつ、記にたよってオホナムチの壮大な宮殿の由緒を天上界に求め、またタカミムスヒではなくカミムスヒを指令神としたところに成り立ったものであると考える。記紀という大和王権側の二つの史書の相違を巧みに利用しながら、オホナムチの権威を主張しようという当国風土記の構想をうかがうことが出来るだろう。なお、このこと研究篇の論考においても述べることにする。（一九七頁）

ここに至って、「注釈篇」と「研究篇」が分かちがたく結びついている所以を知る。この一貫した読みが、本書の価値を高めていることは、間違いない。この評文では二箇所しか具体的には取り上げられなかったが、他の箇所においても同前である。もう一つ、付け加えるべきことがある。それは、風土記関係のみならず、記紀や歴史研究の成果を幅広く取り入れていることであり、この諸説への配慮が本書への信頼性を高めていることも付記しておきたい。

私事にわたって恐縮であるが、ここしばらく学界時評（上代）を担当していて、いろいろ思うことがある。その一つが、風土記研究への注目度の高さであり、研究者人口の少なさに比して、近年のブームともいうべき活況は、やはり注目すべきことであると思う。その核となっているのが風土記研究会であるが、その成果

をまとめた『風土記研究』の最新号（32号）に、松本氏は「巡行する神について―出雲国風土記を中心に―」と題する論を発表している。まだまだそのブームは続きそうである。文学研究の学際化・国際化が叫ばれて久しいが、風土記研究は、意識しなくとも作品そのものがそのような視点を要求している。今という時代性に合うということは、悪いことではない。そのような研究状況の中で、本書は間違いなく研究史に残る仕事としての評価を得るであろう。それが「研究史上の転換点」（あとがき）となるかは、もうすこし見守ることとしたい。

（二〇〇七年一一月　新典社　A5判　六〇七頁　税込一七八五〇円）

新刊紹介

『『おくのほそ道』時空間の夢』

堀切　実著

本書は『『おくのほそ道』解釈事典―諸説一覧―』の編者による『おくのほそ道』を日本文化論の視点で論じた論集である。過去二十年間の論考を増補・改稿して編纂したものだが、従来の日本文学研究法の枠組みを取り払い、他分野の論説を次々に採り入れ、他分野の作品を比較の対照にして、論を進めている。

第一部『おくのほそ道』と日本文化論、において①漂泊への賛美は万人共通の普遍的時空意識を示す、②この短詩型的紀行文学の示す文学空間を読者が想像力を発揮して再創造する、③〝意味の焦点〟の移動による構成法が同作品の特色である、と述べ、第二部　比較文化論の視点から、において①西欧の旅行記との比較、②漂泊の型による比較、③表象文化との比較を行っている。

『おくのほそ道』は日本人の精神の基本的姿勢にかかわる言語空間である、との認識に立つこの意欲的な試みを、日本文学研究の新しい方法論として、若き研究者達に勧めたい。

（二〇〇八年五月　角川学芸出版　四六判　二三三頁　税込二七三〇円）〔大城悦子〕

谷脇理史訳注

『新版　好色五人女』

新版から現代語訳が先に載るようになった角川ソフィア文庫だが、本書は是非原文の方から目を通してもらいたい。先行研究を重んじた丁寧な註釈のもと、西鶴独特の言葉遣いにまず舌を巻くことになろう。さらにその内容の斬新さにも、読者の方々は目を見張るに違いない。これは「恋」などという言葉でひとくくりにされるようなものではない。それこそ己のプライドをかけて一心不乱に生き遂げた女たちの物語である。そしてまた読者はそんな女性たちに対して少しも手加減を加えることなく冷ややかに客観視する作者西鶴の冷酷なまでの筆遣いに背筋を凍らすことになろう。洒脱で軽妙な文体からは想像もつかないような冷徹な視線に、西鶴という文学者の一面を見ることができるはずである。もちろん、古文が苦手という方も、あらすじ付きの現代語訳で十分お楽しみ頂ける。初心者にも西鶴を読み深めたいという方にもおすすめの一冊である。

（二〇〇八年六月　角川学芸出版　文庫判　三一五頁　税込八六〇円）〔木村迪子〕